

を設置した。部会は運営委員会の下の委員会に相当する。募金委員会を除き、運営委員で組織委員会に加わらなかった人々を主なメンバーとする総務部会を新設した以外は運営委員会と同じである。

委員長 小平邦彦, 副委員長 伊藤清, 小松彦三郎, 総務幹事 荒木不二洋, 幹事(会計担当)戸田宏, 幹事 広中平祐, 飯高茂, 永田雅宜, 溝畑茂, 服部晶夫の10氏に, 総務部会長 藤田宏, 財務部会長 田村一郎及び出版部会長 佐武一郎の3氏が加わって幹事会を構成することになった。この他の委員名簿は2nd Announcement, 報告書及びProceedingsにあるので省略する。

第2回以後の組織委員会は運営委員会と合同で行われ, 1989年9月30日と1990年3月30日に開かれた。毎回予算が改定されたが, 外国人の旅費援助に関する部分が主で, 他は大差ない。この間, 文部省, 京都府, 京都市及び京都大学から後援を受けることが決まった。

最終の組織委員会, 運営委員会合同会議は1991年1月19日に開かれ, 決算を承認後, 解散の予定である。1990年11月現在決算はまだ終わっていないが, 3500万円程度剰余金ができる見込みである。参加費が1500万円超過した一方, エクスカーションの補助金が申込が少なかったため1000万円残り, また会議事務請負業者を使えば支払わなければならなかった1000万円がそのまま残ったことによる。外貨事情が悪い国々からの参加者は事前送金できなかったため参加費を1万円多く払った上, エクスカーションの補助もなかった。剰余金はこれらの国々に還流するよう処分したいと考えている。

南アフリカ人入国問題(数学41(1989), 94-95)など政治的問題もなかったわけではないが, 世界の和解に助けられて殆どは消えてしまった。日本の経済と円ドル交換率も我々に味方してくれた。

開会式で述べたように, 私はICMを, 数学を統一ある形で継承発展させてゆくためのお祭りとして理解しているが, そのための計画をほぼ100%達成できて幸せである。

(こまつ ひこさぶろう・東京大学理学部)

## ICM-90 を振返って

荒木 不二洋

第11回国際数学連合総会および第21回国際数学会議は, それぞれ8月18日~19日神戸国際会議場および8月21日~29日国立京都国際会館において開催され, 盛会裏に終わった。編集部の御依頼によれば, 小松彦三郎会議会長が総括記事を書かれるとのことで, 以下いくつかの思い出を記することに。なお, 総会, 募金, ビザに関係した渉外等については, より関係が深い小松会長が, また広報, 数学会員からの募金については飯高茂広報部長がそれぞれ書かれると思われるので触れないことに。

### 1. 招致

国際数学会議(ICM)日本開催についての検討は1983年頃からはじめられたが, 1984年にICM90検討委員会が日本数学会に正式に設けられ, 同年5月21日の第1回会合から著者もその

委員として検討に参加した。秋には京都を開催地第一候補とする方針がきまり、準備委員会を発足させるために小松彦三郎氏と著者が幹事にきまった。

翌年1月19日の第6回(最終)検討委員会で準備委員会発足の用意が整い、2月16日には第1回のICM 90 準備委員会が行われた。それまでに国際数学連合(IMU)理事会へ提出する‘京都におけるICM 90 開催の暫定案’というICM 京都招致の英文冊子を作成し、これを検討して頂いた。そこでの御意見をを入れて作った冊子の最終版は、5月9日、10日に開催されたIMU 理事会で溝畑茂理事から提出され、その場で京都開催が内定された。

冊子には色刷りの京都観光案内や会場となる国立京都国際会館のパンフレットなども入れ、会議場の各部屋の座席数と使用計画、ホテルの収容力と値段、朝食の値段や会議場での昼食、大阪空港への航空便や京都への交通、ホテルと会議場間の交通、社交行事等かなり詳細に述べ、結果的にもほぼ記述通り実行された。外国の理事のひとりとはあとから‘この説明冊子に感心してすぐにOKと思った’とほめてもらった。

この提案で開催時期として8月末の他に、もっと気候のよい10月、5月末、春休み中、その他の可能性をあげたが、各国の様々な事情から従来通りの8月末に落ち着いた様である。8月末の場合冊子の案は8月21日からにしたが、これは次の事情による。8月16日には京都では送り火があり宿が超満員になる。ところがその週の日曜の8月19日を過ぎると、お盆をピークとする夏休み中の旅行客はパタッとなくなり、まだ修学旅行生等京都目当ての観光客もないので、京都の宿はオフシーズンになる。この様なJTBの説明に従い8月21日からの会期を提案した。花博の為、京都のホテルもかなり影響を受けたが、それでもこの選択がきいて何とか捌くことができた様である。

実は京都を開催地第一候補とすることがきまった時点で国立京都国際会館を非公式に押さえた。それも冊子に提案した複数の時期についてであった。その結果、あとから8月末の同じ時期に申込んで来た他の大きな学会をもう1週間前へ追いやる結果になったが、その学会はホテルについても、またお盆の鉄道や航空路についても、確保に苦労したとのことである。

## 2. 学術プログラム

ICM-90の学術プログラムの骨子及び招待講演者は国際プログラム委員会できめられる。この委員会の委員長及び委員8名はIMU 理事会で決定されるが、主催国からは2名及び4名の委員が選ばれることになっている。

ICM-86の際のIMU 総会でICM 90 京都開催が正式に決定されたことを受けて日本数学会内にICM 90 運営委員会が設置され、その中にICM 90 学術委員会が設けられたが、1987年1月7日の第1回学術委員会では、早速国際プログラム委員会委員候補者を議論した。2月27日の第2回委員会では4名の候補者を決定し、5月22日・23日のIMU 理事会で小松彦三郎理事(1987年1月よりIMU 理事に就任)から提案したが、結果的にはその中から3名が選ばれた。他国からも必ず有力候補者を出してくる純粋数学の分野だけから候補者を立てたのが原因で、もし応用分野の有力者も含めておけば4名になったかもしれないというコメントを聞いた。

第1回の国際プログラム委員会は翌年4月京都で開催され、学術プログラムの骨子と、総数18の分科(前回は19)の決定、および各分科パネルの委員長及び委員の決定が行われた。この委員会の京都開催は日本側の招待によるもので、ICM 90の予算も確定していないこの早い時期の招待費

に多少苦心した。

各分科パネルの推薦がそろった段階で、1989年10月にパリで第2回の国際プログラム委員会があり、1時間の全体講演と45分の分科会講演の招待者が決定された。

BerkeleyのICM86では会議運営について担当者から話を聞き、また翌年春にはアメリカ数学会の本部を訪れてさらに詳細を聞き、大量の書類をもらって帰ったのであるが、その際招待講演者決定について、決定が遅く、しかも国際プログラム委員会から来る名簿では招待講演者の連絡先がわからない場合がかなりあるため、ICM86では違う人に招待状を出したのが1件生じたというようなことを聞いた。そこで招待講演者の特定、特にその連絡先住所の把握を確実にするため、プログラム委員ではなかったが著者もパリへ行き、学術委員会の溝畑茂委員長と密接に連絡をとって補佐することにした。委員会の途中では京都の準備状況を説明し、また委員会終了後直ちに国際プログラム委員会のKuiper委員長と、連絡先住所について種々相談した。しかし連日の討議でKuiper委員長もお疲れの模様で、招待講演者リストの作成も心許なく、連絡先住所についてもあちらこちら電話をかけて頂いたが、すぐには確定しないものもいくつかあった。幸い最終的には招待ミスも起らなかった。

日本へ帰り、小平邦彦会長名で招待状を発送したが、返事がなかなか帰って来ない分がかなり生じた。主として人の移動のために起ったものであるが、電話、ファックス、テレックス、e-mail、電報等を使って連絡をつけるよう努力したが、特にソ連との連絡には苦勞した。幸いペレストロイカで多数の人が西側を訪問するので、それをつかまえることでかなりの場合が片づいた。別の要件で米国かヨーロッパの知人に電話をしていると、その人ならどこそこにいるという情報をもらうこともしばしばあった。

招待講演者の何人かは辞退した。その補充はKuiper委員長と相談する部分もあったが、分科パネルの推薦等を考慮しながら日本の学術委員会で決定した。辞退者の中にはWittenもいた。後で奥さんから聞いたところでは、奥さんが妊娠中のためストップをかけたとのことであった。結局Fields賞受賞者として奥さん同伴で出席し、非公式セミナーとして一時間の講演を行った。前回まで自国政府から出国が許可されないため出席できない招待講演者が少なからずあったが、今回はそのような人が見られなかったのは喜ばしいことであった。

1989年夏に組織委員会が発足してからは学術部会と名を変えたが、会議開催直前まで20回に及ぶ会合を重ね、学術プログラムを練ったこともあり、招待講演者の努力もあって、学術プログラムを高く評価する声を多数の参加者から聞いたのは幸いであった。

### 3. アナウンスメント等

アナウンスメントの発送はICM86の場合とほぼ同様に行なった。1988年2月にまず予備アナウンスメントを各国2ヶ所程度(日本の数学会と数研連に対応する機関)ずつに送り、当該国の数学者等に第1回アナウンスメントを配布して貰えるかどうか、yesならば必要部数を、noならば他の適当な機関か個人を知らせて頂くよう依頼した。同年11月には更に追加箇所へ発送をした。

第1回アナウンスメントは1988年秋から文案を幹事会で検討し始めたが、春の学会の際の運営委員会の承認を得てから25,000部印刷し発送した。他方宣伝のためポスターを作ることになり、J-企画に依頼したところ、外国では人目をひくだろうと思われる良いポスターができた。写真や色

調についての選択も幹事会で議論して頂いたが良い選択ができたと思っている。

第1回アナウンスメントではICM 90の開催日・開催場所等簡単な説明とともに、第2回アナウンスメントの送付依頼書がついていて、これを送ってもらった人に第2回アナウンスメントを送る方式である。第2回アナウンスメントは会議の詳細とともに登録用紙、一般講演(10分間)の申込用紙、宿泊及び遠足の申込用紙等も含めた冊子になった。17,000部作成したが最終的に400部程度しか残らなかった。

第2回アナウンスメントを読み易くするためかなり気を使った。Sectionが変わる度にページを新たにし、できた空白にはいろいろな写真を入れた。また魅力的にするためカラーの表紙にした。デザインは印刷所の平井氏と相談し、算額等も考えたが必ずしも見映えがしないと思われるので、日本調で夏らしいデザインを選んだ。書き込むべき和歌の選択に迷ったが、百人一首の中で京都近辺を詠んだものを探すと、2首見つかり、そのうち旅の出会いに関係しているので会議にふさわしいという判断で、‘これやこの行くも帰るも別れてはしるもしらぬも逢坂の関’に決めた。ちなみにこれは私の母の唯一の得意札でもあった。

第2回アナウンスメントは1989年11月に印刷したので学術プログラムは枠だけであった。招待講演者やその講演題目、さらには時間割を知りたいという要請を多数受取った。特に割引料金での登録の締切り5月15日までにその情報をもらわないと、参加する価値があるかどうかの判断ができないとか、日程を立てることができないとか、いろいろな御要求を特に外国から受けた。幹事会としては、招待講演者各自からの受託の返事がそろったところで一覧表を公表したいと考えたが、これがなかなかできず、結局国内の数学教室等に1990年5月1日付で、まだ数名追加が確定していない段階で一覧表を送るのが精一杯であった。

一般講演の申込みも、4月15日の締切りを過ぎても、特に郵便事情が悪いと思われる東欧や発展途上国から次々と到着し、これも受付けるより仕方がないと判断してかなり遅い時期迄受付けた。

この様な事情で、時間割を作るのは更に遅くなり、学術部会、幹事会等の討議を経て6月頃にできあがった。招待講演の時間割と、一般講演について人名を含まない分科別の枠を主な内容とする第3回アナウンスメントは、7月に5000部作成し、会議の予備登録者および諸機関に配布した。

一般講演の具体的な時間割は結局会議当日配布のプログラムに印刷した。当初800件位を予想し、775件の申し込みがあったが、キャンセルが多数あって最終的な講演数は620件であった。発展途上国を含めて多数の国では、講演申込みが受理されないと公的補助や外貨割当等の関係で登録料の払込みができないとか、外貨交換規制のため会議当日でないと登録料が払えないとかの理由で、登録料を払わないで講演申込みをした人が多数あり、止むを得ないということでこれを受付けたが、その中から資金的な理由で来ることができなくなった人がある程度できたのが主因と思われる。

招待講演のアブストラクトについては、招待講演者との連絡を密にし、返事が来ない人については種々の方法で個別に通信を試みたので、よく集ったと考えている。招待講演と一般講演について別々にアブストラクト集を作成した。プログラムも含めて単純な印刷を考えていたが、第2回アナウンスメントのでき映えから、これらの印刷物についても期待しているというコメントを聞くに及び、プログラム及びアブストラクト集の表紙も多少見られるものにならなくてはならないことになった。再び印刷所の平井氏と相談し、京都の観光地のカラー写真を表紙に使うことにした。前回のICM 86に比べれば、ずっときれいなものができたと思っている。

#### 4. 事務局

当初は京大数理研で外国人来訪者の世話をしている国際交流室に ICM 90 事務局をおき、1 人の方に研究所の仕事のかたわら事務をお願いした。ある時点で会計を加え 1989 年夏頃から私の部屋にも担当者を雇うことにした。第 2 回サーキュラーを発送して予備登録が入ってくる同年末頃から本格的な事務局を目指して順次増員し 1990 年春には数人のスタッフになった。私の部屋では手狭になり、数理研内の一室を ICM 90 専用にし、私の部屋に ICM 90 の会計、ICM 90 室に庶務等、更に国際交流室の 1 人にも手伝ってもらった体制になった。更に会議が近くなって事務が錯綜してくると庶務等は 10 人位の人数になりもう 1 室使うことになった。会計も人数がふくれ上った。

この頃になると私も 1 日中走り廻ることになる。ICM 90 庶務の部屋へ用事を頼みに行くと説明すると、途中で必ず「電話です」ということで自室へ戻る。電話をしていると、研究所事務や ICM 90 事務さらにいろいろな人が用事を持って来る、という具合で、場合によっては 2 つか 3 つのことを同時にする破目になった。当然 1 日中誰かと話すことになり喉が干されて来た。そこで絶えず喉あめをしゃぶってこれをしのいだ。

会議前の 1 ヶ月位は、ICM 90 の秘書達も研究所が 7 時半に開錠になるとまもなくやって来て、研究所がしまる夜中の 12 時の直前に帰るといった状態になった。特に中心になって頑張り、特に会議場では一番経験を積んでいるので皆に指令をする役をはたした秘書も、会議のあとしばらくはがらがらの声になっていた。

事務局には講演者との連絡、頻繁に開かれる幹事会や学術部会等の資料作り、予備登録事務、参加希望者等からの電話や訪問による問合わせに対する応待等々、会議直前には多様な用件が押し寄せ、会議当日も、前日のホテル京阪の登録の後始末に夜中の 1 時迄かかった上、当日早朝から会議場での登録準備を始めるなど、強行軍の連続であったが、事務局の秘書の献身的な努力により、参加者からは best ICM と評価される会議になった。

登録に関しては会議専門の業者に任せる道もあったが、かなり高額な依頼費がかかることから、自前で処理することになった。その代り会議参加者の要望に直接柔軟に対応できたと思うが、同時に会議参加希望者との文通等の対応が忙しさを増した。さらに登録事務用データベースの構成・管理については塚本千秋氏の大変な御協力によって切り抜けることができた。会議場に聞いたところでは、このような大きな会議で会議専門の業者にまかせないのは初めてであったようである。

会議の登録時にプログラム・アブストラクト集その他を入れて配布する Congress Bag については、種々の見本を見せてもらい幹事会等の意見も聞いたが、形態としては ICM 86 の時のものが単純で、かつ帰国時の持帰りにも便利との結論になった。チャック等でふたのできる袋部分や名札をつけるとか、紐の取り付け位置や長さを少し変更するとか多少の機能的改良はするにしても、前回と似たものでは面白くないので、京都らしさを出すようにしたいと考え、会議場から西陣の業者を紹介してもらって、西陣織物館でサンプルを見ながら相談をした。結局材料として着物の布地を使うことにして、業者にサンプルを作ってもらうことになった。業者が最初に持って来たものにつき、秘書等いろいろな人の意見を聞き、幹事会にも相談し、いくつかあった色から青系統の色を選んでお願いした。ところが決定に時間を取り過ぎたためかもうその柄の反物は無いと言って業者がすっ飛んで来た。さらに業者はひとつの柄で 4000 人分そろえられる反物がないと言う。私の意見では

柄をそろえるよりもいろいろあった方がかえて好きなものを選べる可能性ができてよいと思われた。もう幹事会等に相談する時間的余裕もないので、業者が持って来た非常にたくさんの見本から、傾向の違うもの8種類を秘書と相談しながら正参加者用 bag に選び、計4200個を注文した。同伴者用には少し小型でわきにかかえるタイプの既製品があり、そのうちから3種類の柄を選んで200個ずつ計600個注文した。

結果的にはすこぶる好評であった。IMU 総会参加者の為に、これを総会会場の神戸国際会議場へ持っていった時にも、神戸の会議場の人が京都でなくては作れないものだと言って盛んに写真を撮っていた。個数については、参加者数が予想より多くなったので足りるか心配したが、何とか間に合った様である。多分もっと沢山作ってあっても、土産として十分売れたものと思われた。

## 5. その他

1990年4月にはケンブリッジ大学でIMU 理事会が開かれ、その際に次の開催地をきめる site 委員会も開催された。現開催地から2人が site 委員会に加わるという規則により、理事の小松氏のほかに著者もその委員となっていたので、この site 委員会に出席し、次回 Zürich 開催が内定した。この機会に、小松氏と著者は、IMU 会長でもあり、従って Fields 賞委員会の委員長でもあるソ連の Faddeev 氏から、Fields 賞受賞者名を知らされ、また受賞者業績の紹介者についても一部相談を受けた。授賞通知は Faddeev 氏が手書きの手紙を書いたが、Jones 氏の分は、私がおのあと IHES へ立ち寄ったので、依頼により Faddeev 氏の手紙を届けた。森重文氏宅に電話でお知らせしたがお留守で奥さんに伝えた。勿論8月21日の授賞式まで極秘ということもお二人に伝えた。Jones 氏は親戚10名程を京都に集めたが、自分の受賞を言わずに開会式に出席するよう説得するのに苦労したと言っていた。森氏一家が一番困られたと思うが、私のところ迄新聞記者等から何度も電話及び訪問取材があり、夜遅く自宅まで訪ねてくる記者もあった。

授賞式も含めて開会式を京都らしく、しかも華やかにするため、雅楽・舞楽を使うことを早くからきめた。京都にはいくつものグループがあるので、私の高校の同級生である岡崎神社の宮司に尋ねたところ、鷲森神社に頼むのがよいということで、彼と一緒にお願いに行った。会議開催までにこの神社の石宮司が亡くなり、結局その娘さんの原笠子さんをお願いすることになった。会議は雅楽で始め、演説がすんだところで舞楽を演じてもらって、そのあと授賞式を行い、そこでも雅楽の伴奏を入れることにした。ただ前日のリハーサルするときこの詳細を Faddeev 氏に伝えてなかったもので、Faddeev 氏が Fields 賞授賞のスピーチを始めようとしたときに雅楽が演奏され彼がびっくりするハプニングが起きた。しかし全体として印象的に行えたと思う。

開会式そのものは例年のように行い、会議名誉会長の推薦は、主な主催者のひとつとして日本数学会の服部理事長が、また歓迎のスピーチは主な主催者のもうひとつである日本学術会議の会長が行った。名誉会長に予定していた小平邦彦組織委員長が出席できなかったのは残念であったが、伊藤清副委員長がその役をうまくこなした。祝辞は後援をして頂いた機関の長として、保利文部大臣、荒巻京都府知事、田辺京都市市長、西島京都大学学長の4名をお願いした。祝辞の最初に海部総理大臣の祝電を被露し、最後に記念切手の贈呈が行われた。

後援の依頼はかなり手数がかった。例えば京都市の場合、ICM 86 で京都開催が正式にきまったのを受けて、当時の今川市長に挨拶に行った。会議が近くなって選挙で市長が変わり、まず市長

秘書室をお願いした。後援の担当は教育委員会ということでそちらへもお願いに行き、また国際交流室にも出向いた。具体的案件については、参加者に配布するパンフレット等を頂くため、新しくできた市の国際交流会館内のコンベンション・ビューローを訪れ、また市バスの使用について交通局へ出向いた。

ほかにもいろいろ思い出があるが、紙数が一ぱいになったので、ここで筆をおく。

(あらき ふじひろ・京都大学数理解析研究所)

---

## ICM 90 が終わって

飯 高 茂

ほっとしているところなので、なるべく簡単な報告ですませたい。私の担当した主な仕事は、広報委員会の活動と募金の事務であった。以下思い付くままに6項目にまとめるが、その他に細かい仕事が色々あり充実した3年間をすごすことができた。

### 1. シンボルマークの公募、選定、仕上げること

ICM 90 のシンボルマークのデザインを公募することになり、雑誌‘数学’、数学セミナー、その他流通ジャーナル等に公募の知らせを載せて一般からの図案を求めた。その結果169人の方が232点の作品を寄せてくれた。応募者は全国に亘り、また年齢のスペクトルは15から80にまで及ぶほど幅広かった。大学の数学教師、数学科学生はいうにおよばず、農業、自営業、公務員、更に専門のデザイナー5氏も作品をよせた。応募者に対して、毎回返事を書き、統計をとるのは存外面倒な仕事であった。そのため、応募作品を返却するという仕事をしなかったのは、申し訳ないことであった。1987年9月29日にICM 90 広報委員会で選考し青木一芳氏(中央大学理工学部)の作品を入選とした。作品は‘京’という文字を石燈籠風にデザインしたものである。‘京’は、会議開催地の地名であり、又数字とみると、10の16乗を表し3重の意味をもたせたものであった。これを、(日本評論社に關係している)グラフィックデザイナー駒井佑二氏が、最終的なデザインに仕上げた。氏は、縦置きデザインの他に横置きデザインもつくられた。これらは会議の色々な文書の表紙、切手、ポスターなどに用いられた。特にICM 90 記念Tシャツのデザインとして活用された。デザインを全国から公募したことは、記念切手の発行を申請するときに役立つことになった。なお、原案者の青木氏には30,000円、デザイナーの駒井氏には50,000円を差上げた。破格に安い費用ではあったが、商業目的でないこと、マークは世界中で記憶されることを理由に納得していただいた。3重の意味をもたせたシンボルマークは好評であり、新聞の報道で傑作マークの例として数学セミナーなどの科学雑誌はもとより、朝日、東京などの新聞に数回に亘り取り上げられた。

### 2. ICM 90 数学会特別募金

企業法人から募金をするに先だちまず日本数学会会員から募金をすることになった。

会員諸氏の協力のおかげで目標額3000万円以上のところ1987年11月から1990年8月までで